



情報理論

第7回 講義

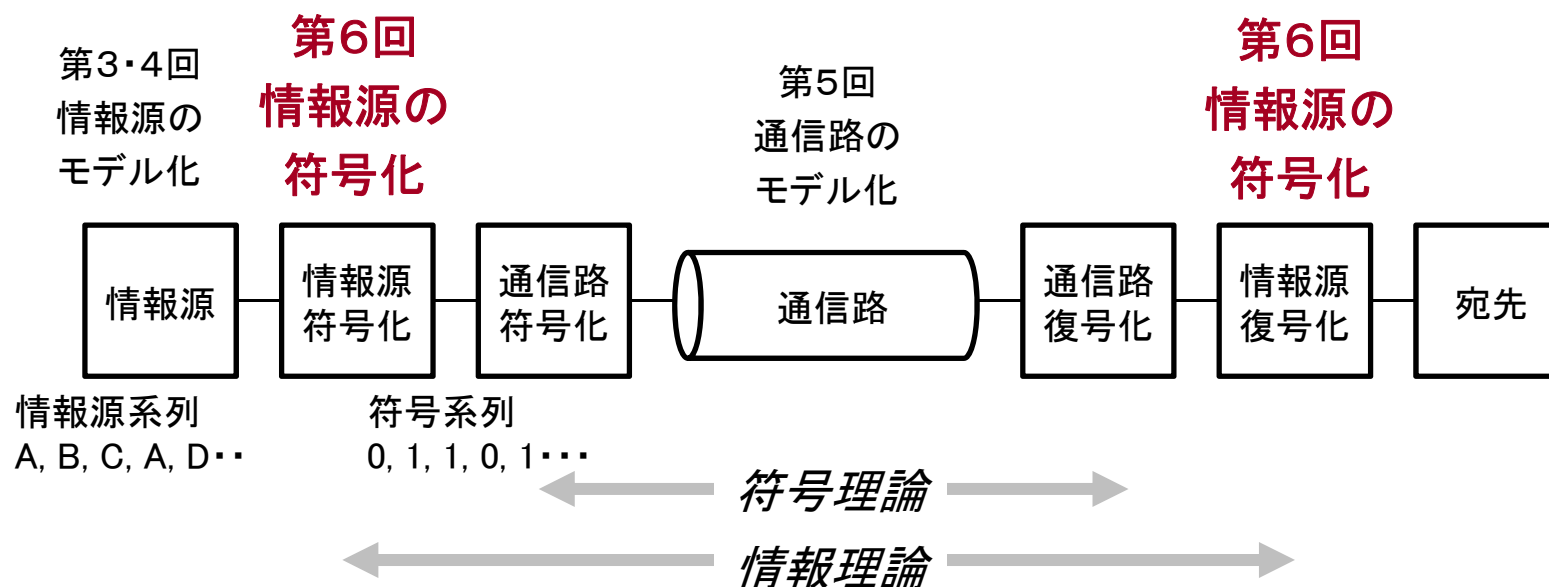
情報源の符号化(平均符号長の限界)

2015. 6. 3

植松 芳彦

本日の講義範囲と内容

1. 情報源符号化に必要な条件
2. 瞬時符号と符号の木
3. 瞬時符号と符号長の関係



クラフトの不等式

- 長さが l_1, l_2, \dots, l_M からなる M 個の符号語を持つ符号が瞬時符号となる条件を考える.
- それぞれの符号語が「葉」に対応したとき, 長さ l_i の符号語に行きわたる養分は 2^{-l_i} . 養分の総和は1を超えない.

$$2^{-l_1} + 2^{-l_2} + \dots + 2^{-l_M} \leq 1 \quad (\text{式4.2})$$

- 符号語が $\{0,1\}$ の2元符号でなく q 元符号の場合, 個々の接点で q 個に分かれるので

$$q^{-l_1} + q^{-l_2} + \dots + q^{-l_M} \leq 1 \quad (\text{式4.3})$$

- 符号語の数 (M) が大きいとき, l_1, l_2, \dots, l_M はあまり小さい値にできない.

今回やりたいこと

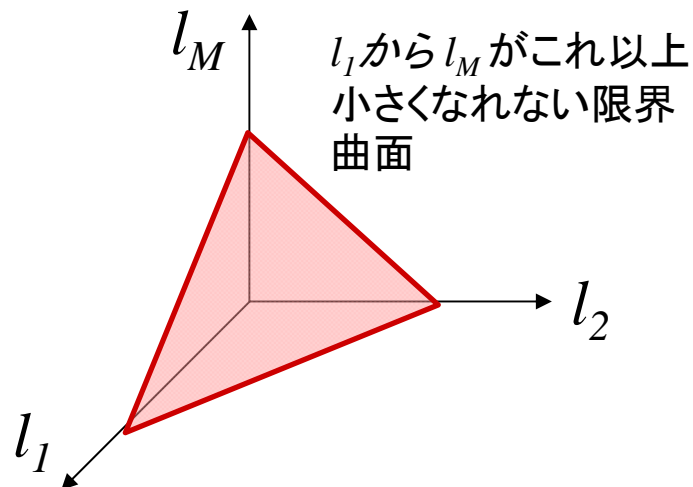
- クラフトの不等式が制約条件として与える場合, 平均符号長の下限を導く
- 情報源 S の条件
 - 情報源アルファベット a_1, a_2, \dots, a_M
 - 各記号の発生確率 p_1, p_2, \dots, p_M
- 情報源符号化 の条件
 - 一意復号可能な2元符号に符号化
 - 各符号語の長さ l_1, l_2, \dots, l_M

今回やりたいこと

- クラフトの不等式が制約条件として与える場合、平均符号長の下限を導く

クラフトの不等式(制約条件)

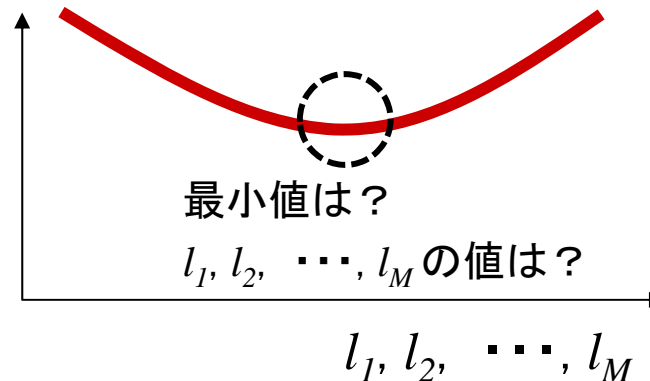
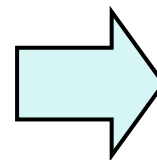
$$2^{-l_1} + 2^{-l_2} + \dots + 2^{-l_M} \leq 1$$



求めたいもの

$$L = l_1 \cdot p_1 + l_2 \cdot p_2 + \dots + l_M \cdot p_M$$

平均符号長



やりたいことのイメージ



定理

- 平均符号長の最小値

$$H_1(S) \leq L \quad (\text{式4.6})$$

- 以下の条件を満たす瞬時符号を構成可能

$$H_1(S) \leq L < H_1(S) + 1 \quad (\text{式4.7})$$

- 情報源 S の一次エントロピー $H_1(S)$

$$H_1(S) = - \sum_{i=1}^M p_i \cdot \log_2 p_i \quad (\text{式4.8})$$

p は確率で1より小さいため $H_1(S)$ は必ず正
平均符号長の最小値は各符号の発生確率だけで決まる

補助定理

- p_1, \dots, p_M (p_i は非負) に

$$p_1 + p_2 + \dots + p_M = 1$$

- q_1, \dots, q_M (q_i も非負) に

$$q_1 + q_2 + \dots + q_M \leq 1 \quad (\text{式4.9})$$

- が成り立つとき, 以下の関係が成立.

$$H_1(S) = -\sum_{i=1}^M p_i \bullet \log_2 p_i \leq -\sum_{i=1}^M p_i \bullet \log_2 q_i \quad (\text{式4.10})$$

$$\text{等号条件} \quad p_i = q_i \quad (i = 1, 2, \dots, M)$$

(証明)補助定理

$$\begin{aligned} D &= -\sum_{i=1}^M p_i \bullet \log_2 q_i + \sum_{i=1}^M p_i \bullet \log_2 p_i \\ &= -\sum_{i=1}^M p_i \bullet \log_2 \frac{q_i}{p_i} && \longleftarrow \log_b a = \frac{\log_e a}{\log_e b} \\ &= -\frac{1}{\ln 2} \sum_{i=1}^M p_i \bullet \ln \frac{q_i}{p_i} \\ &\geq \frac{1}{\ln 2} \sum_{i=1}^M p_i \bullet \left(1 - \frac{q_i}{p_i}\right) && \longleftarrow \begin{array}{l} \ln x \leq x - 1 \\ -\ln x \geq 1 - x \quad (\text{式4.11}) \end{array} \\ &= \frac{1}{\ln 2} \left(\sum_{i=1}^M p_i - \sum_{i=1}^M q_i \right) && \longleftarrow \text{単なる式展開} \\ &= \frac{1}{\ln 2} \left(1 - \sum_{i=1}^M q_i\right) \geq 0 && \begin{array}{l} \longleftarrow \sum_{i=1}^M p_i = 1 \\ (\text{式4.12}) \end{array} \end{aligned}$$

(証明) 補助定理

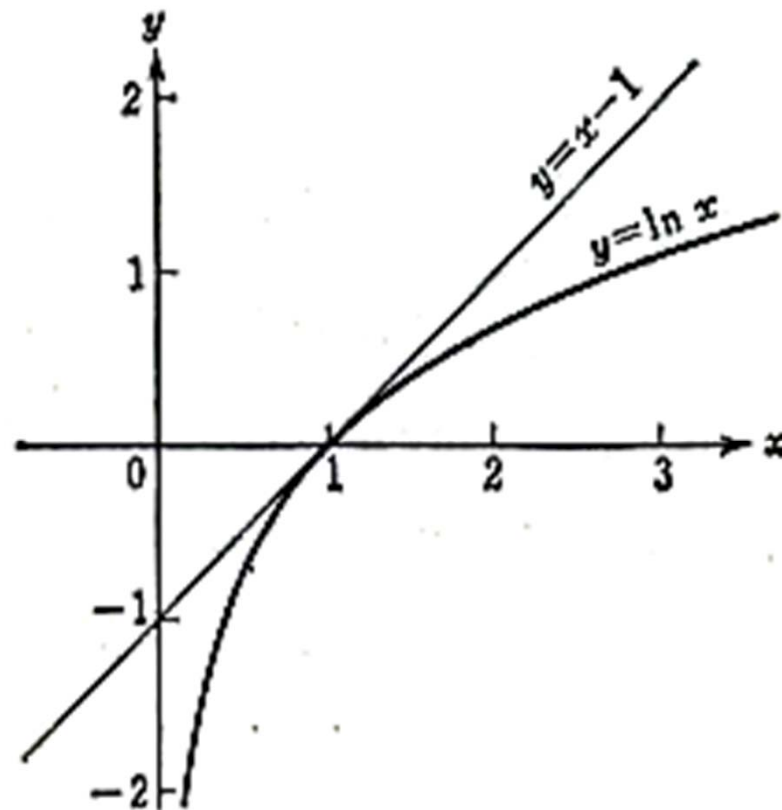


図 4.3 $\ln x \leq x - 1$ の説明図

(証明) 定理(1／3)

- 補助定理において, $q_i = 2^{-l_i}$ と置くとどうなるか.
- l_1, \dots, l_M に

$$2^{-l_1} + 2^{-l_2} + \dots + 2^{-l_M} \leq 1$$

クラフトの不等式そのもの

- の関係が成り立つとき,

$$\begin{aligned} H_1(S) &= -\sum_{i=1}^M p_i \bullet \log_2 p_i \leq -\sum_{i=1}^M p_i \bullet \log_2 q_i \\ &= \sum_{i=1}^M p_i \bullet l_i = L \end{aligned}$$

等号条件 $p_i = 2^{-l_i} \quad (i = 1, 2, \dots, M)$

定理(式4.6)そのもの

(証明) 定理(2／3)

- 次に実際に瞬時符号が作れることを示す,
- 以下の条件を満たす整数 l_i があることは希.

$$p_i = 2^{-l_i} \quad (i = 1, 2, \dots, M) \quad (\text{式4.14})$$

- 以下の式を満たすよう整数 l_i を決めることは可能

$$-\log_2 p_i \leq l_i < -\log_2 p_i + 1 \quad (\text{式4.16})$$

$$\frac{p_i}{2} < 2^{-l_i} \leq p_i \quad (\text{式4.17})$$

- このように決めた l_i に対してクラフトの不等式は確かに成立する.

$$2^{-l_1} + 2^{-l_2} + \dots + 2^{-l_M} \leq p_1 + p_2 + \dots + p_M = 1 \quad (\text{式4.18})$$

(証明) 定理(3／3)

- 更に以下により定理は完全に証明される

$$-\log_2 p_i \leq l_i < -\log_2 p_i + 1 \quad (\text{式4.16})$$

← 各辺に p_i を掛ける

$$-p_i \cdot \log_2 p_i \leq p_i \cdot l_i < -p_i \cdot \log_2 p_i + p_i$$

← $i=1 \sim M$ まで和をとる

$$-\sum_{i=1}^M p_i \cdot \log_2 p_i \leq \sum_{i=1}^M p_i \cdot l_i < -\sum_{i=1}^M p_i \cdot \log_2 p_i + 1$$

← 元々の定義

$$H_1(S) \leq L < H_1(S) + 1$$



定理の実験的な証明

- エクセルシートを参照のこと.